

マルクス主義と現代革命

エルネスト・マンデル 著

水谷 驍 訳

Ernest Mandel Revolutionary Marxism Today

柘植書房

マルクス主義と現代革命

エルネスト・マンデル 著

水谷 驍 訳

Ernest Mandel
Revolutionary
Marxism Today

柘植書房

エルネスト・マンデル著
マルクス主義と現代革命

1980年9月20日 第1刷発行

訳者 水谷 驍

発行所 株式会社 柘植書房
千代田区神田神保町1-46-2 (美成社ビル)
電話(03)291-0991 振替東京 3-43287

印刷所 有限会社 西田整版所
有限会社 八光印刷

製本所 株式会社 根本製本所

(落丁、乱丁本はお取替えいたします。) 0030-21151-4819

訳者まえがき

本書はエルネスト・マンデルの近著 *Revolutionary Marxism Today* (NLB, London, 1980) の翻訳である。ただし翻訳にあたっては紙幅の関係から原著の約三分の一にあたる部分を割愛せざるを得なかった。この結果、本訳書の構成が原著とは多少異なるものとなったことをあらかじめおこたわりしておきたい。

相違点の基本は、全部で四章からなる原著のうち、内容が相対的に独立している第四章の大半を削除し、活かした部分のうち、アメリカの労働者階級の諸問題を考察した項、および中ソ論争を扱った項を、内容上の関連性を考慮してそれぞれ第一章および第三章の末尾に移し、また、討論全体のしめくくりとしての内容を有する「社会主義革命の三つの分野」および「われわれが望む社会主義」をもって本訳書の第四章としたことである。このほかにも、原著の第一、第三章のうち、前後から相対的に独立した内容を有し、かつその内容がマンデルの他の著作においてより詳しく展開されていると考えられた部分も何カ所か削除した。以上のような操作によって、例えば原著第四章の第二次大戦末期の情勢を論じた部分や、第四インターナショナルの戦後史を論じた部分など、いくつかの興味深い項

が少なからず削除されることになったとはいえ、具体的な歴史的過程を媒介にして今日における革命的マルクス主義の意義を説くという原著の目的は基本的に損なわれなかったと確信している。

本書は、ニュー・レフト・レビュー・ブックス編集部のジョン・ロスタイルドその他数名の第四インターナショナル同盟員がいくつかの機会にマンデルに対して行なつて、『ニュー・レフト・レビュー』その他に発表したインタビューを素材としている。補足的インタビューを追加して首尾一貫した現代マルクス主義論としてロスタイルドが再構成したのが本書である。

原著には注解の類は一切なかったが、日本の読者に必要と思われる範囲で訳注をつけておいた。文中に一連番号を付して巻末にまとめたのがそれである。

藤原次郎氏には、本訳書の解説をお願いしたばかりでなく、訳稿に目を通して問題点を多々指摘して頂き、また原著の圧縮作業にも力を貸して頂いた。ここに記してお礼申しあげたい。

一九八〇年八月十二日

水 谷 驍

マルクス主義と現代革命／目次

訳者まえがき——1

第一章 西側世界における社会主義の戦略——7

- 世界革命と十月の「モデル」——7
- 革命的危機とブルジョア民主主義——14
- ソヴェエト民主主義の経験——28
- 南ヨーロッパにおける結果と展望——45
- ユーロコミュニズムの危機——55
- 改良主義のヘゲモニーと統一戦線——61
- アメリカ労働者階級の状態——71

第二章 第三世界における永久革命——87

- 永久革命と植民地革命——87
- 従属的蓄積の限界——100
- 永久革命——理論か戦略か？——111
- 反帝国主義闘争のパターン——124

一九五九～七九年のキューバ	130
労働者国家の登場	138

第三章 東側世界の過渡的体制——145

「過渡期」の概念	145
ソヴェト経済の運動法則	153
官僚の社会的性格	162
労働者階級、官僚、国家	170
資本主義の復活か政治革命か？	183
東ヨーロッパ	187
中国革命	190
中ソ論争	196

第四章 世界革命と社会主義——215

世界革命の三つの分野	215
われわれがめざす社会主義	219

訳注——229

解説——259

第一章 西側世界における社会主義の戦略

世界革命と十月の「モデル」

——トロツキスト運動は長いあいだ、世界革命という考え方と同一視されてきました。これは、「一国社会主義」理論に対してだけでなく、たとえばある特定の国や地域を国際的な政治闘争の決定的な舞台または「中心地」とみなす同様のあらゆる主張に対して、トロツキスト運動が対置してきた考え方でした。ところが近年、第四インターナショナルの理論的著作の多くは、世界のあるひとつの部分、すなわち西ヨーロッパに焦点をあてています。そして、現代世界におけるプロレタリア革命の戦略に関する議論が、いつの間にかヨーロッパの革命過程に関する議論になっているようです。これはなぜでしょう。そしてこれは、トロツキストの分析を、世界革命の理論を無視して特定の方向にねじまげてしまう、根の深い「ヨーロッパ中心主義」の反映ではないでしょうか——

世界革命とは、二十世紀の歴史を支配している客観的な過程です。しかしこの世界革命は、それに対応する世界経済と同じように、不均等に發展します。

今日にいたるまで、社会主義革命は、ロシア、ユーゴスラヴィア、中国、ベトナム、キューバといった、比較的低開発の諸国で生じてきました。ところで、社会主義革命は、大衆運動ともなうものです。たとえ、その運動が官僚的に統制されていようと、いずれにせよ人民大衆の行動というものをともなう資本主義廢絶の革命です。そこで、これまでの革命を考えてみますと、そこでは、ロシアを別にすれば、革命に参加した大衆の主な勢力は、都市プロレタリアート以外の層でした。しかも、ロシアにおいてさえ、都市プロレタリアートは、たしかに政治的には指導的な役割を果たしたとはいえ、社会的にみて弱い勢力だったのです。こうした、これまでの革命における諸要素は、革命闘争の主要な形態と、その革命から生じた新しい国家の主要な性格に、決定的影響を与えています。

しかし、低開発諸国を経由するという、今日までの世界革命の不均等發展のプロセス、つまりこの歴史的な回り道は徐々に終りに近づいているというのが、第四インターナショナルの確信です。フランスにおける一九六八年五月のセネラル・ストライキに端を発した深刻な政治的社会的危機¹⁾以来、明らかに世界史の流れが変りました。われわれは、世界革命の過程において、都市プロレタリアートが今後ますます重要な役割を果たすようになるし、また、今も果たしつつあると深く確信しています。

これを純粹に「地理的」に限定された現象と考えるはなりません。高度に工業化された帝国主義諸国で革命的爆発が生じようとしているだけでなく、多数の半植民地諸国や数多くの官僚化された労働者国家においていまやプロレタリアートが有業人口の圧倒的多数部分となつて前面に登場しており（あ

るいは急速に登場しつつあり)、こうして、低開発諸国における永久革命と労働者国家における反官僚政治革命を担う隊列の主力が形成されようとしています。

主として都市労働者階級に依拠する社会主義革命は、相対的に低開発の諸国の革命とは非常に異なった特徴を有するでしょう。そうした特徴を明らかにするにあたって、われわれは、単なる憶測に陥らないよう、実際の歴史的経験に依拠しなければなりません。ところが今日にいたるまでこうした革命は、たとえば敗北に終わったとはいえ、主としてヨーロッパで生じています。おそらく唯一の例外は、一九七〇年代初期のチリの経験でしょう。ですから、革命戦略の主たる特徴を今日の西ヨーロッパにあてはめて説くことは、決していわゆる「ヨーロッパ中心主義」の落とし穴にはまることではありません。それはただ、議論をできるかぎり具体的なものとしたいという努力の現われなのです。都市に依拠したプロレタリアートの革命的闘争の実験室は、歴史的にヨーロッパでした。しかも客観的諸条件と労働者階級の意識の水準が、社会主義革命の展望を最もさし迫ったものとしている国もまた、ヨーロッパ諸国、とくに南西ヨーロッパ諸国なのです。

近年における第四インターナショナルの理論的著作の多くがヨーロッパに焦点をあてているのは、こうした理由によります。しかし、忘れてならないことは、われわれの分析、およびそれに基いた戦略とが、ヨーロッパだけに適用可能なのではなく、北アメリカや日本、オーストラリア、それにたとえばブラジルやアルゼンチン、メキシコ、韓国といった比較的工業化の進んだ低開発諸国にも、あてはまるということです。われわれは、今後数年のうちに、ヨーロッパだけでなくその外においても、圧倒的にプロレタリア的な性格をもった革命が生じると、深く確信しています。この意味で、ヨーロッパに焦点をあてた革命戦略に関する議論は、決して「ヨーロッパ中心主義的」とはいえませんが、ど

ここにおいても同時に不可欠とされる闘争の戦略を詳しく論じることが、その目的だからです。しかしこの戦略が科学的であるためには、換言すれば、実際の経験に基くものであるためには、この戦略を生み出す議論が、現実そのものに依拠していることが必要です。それゆえ、まず西ヨーロッパに関して議論がなされなければならないでしょう。

——それでは、いまの質問と関連した問題について、お尋ねします。これまでの革命はすべて、相対的に後進の諸国で生じてきました。今のあなたの指摘によれば、ロシア革命でさえ、こうした事実認識に対するごく部分的な例外をなすにすぎないわけです。ところで、革命的左翼に対して、とくに第四インターナショナルに対してよくなされる非難のひとつは、まさにそれが、西ヨーロッパ先進資本主義諸国の現実に対して、ロシア革命から得られた「モデル」を機械的に重ね合わせる、という点にあります。国家の崩壊、ソヴィエトの台頭、二重権力、脇に押しやられる改良主義者、ソヴィエト権力とブルジョア権力との衝突が發展してついには蜂起にいたること、などです。しかし、と、批判的な人々は主張します。対象となる社会構成が現実には非常に異なっているのだから、このようにボルシェヴィキの図式を重ね合わせることは、長期ゲリラ戦という毛沢東主義者のモデルや、あるいはゲバラ流、ベトナム型等のモデルをあてはめるのと同様無意味である。西ヨーロッパ資本主義社会の独自性は、権力獲得のための等しく独自の、また別の戦略を要求する、と。この点はどう考えますか——

いくつかの問題が混じりあっていますね。まずはじめに、ロシア革命の「図式」ないし「モデル」のうちの、固有にロシア的なものと、普遍的なものとを、区別することから始めなければなりません

ん。革命的危機の持続や、ソヴィエトという形態をとった大衆の自主組織、ソヴィエト内部で多数を勝ち獲るためにボルシェヴィキが利用した戦術、あるいはブルジョア国家の崩壊の具体的な形態、こうしたものは、ロシアに固有だったわけではありません。これは独断的な主張ではなく、半世紀以上の歴史的経験から引き出された結論です。いま私があげたいいくつかの特徴のすべてと、これ以外の少なからざる特徴の数々は、一九一七～二三年のドイツ革命や、一九三六～三七年のスペイン革命、また——ずっと萌芽的な形態ではあったにせよ——一九七四～七五年のポルトガルの革命的過程⁽⁴⁾においても、認めることができました。その初期の兆候は、一九二〇年のイタリアの諸事件⁽⁵⁾や、第二次世界大戦末期のイタリアの革命的高揚⁽⁶⁾、さらには一九六八年のフランスの五月においてさえ、認められました。だからこそわれわれは、こうしたものが西ヨーロッパにおける革命的危機の、もっともありうる形態であるはずだと考えているのです。

同じように、一九一七年の二月革命から十月革命にいたる間のロシアにおけるツァー体制ないしブルジョア的国家機構の解体の深さは、決してロシアの社会機構に固有だったわけではありません。それは今あげた西ヨーロッパの革命的危機のすべてにおいて——多分、形態は異なるにせよ、同じ、時によつてはもっとはつきりした力強さで——くりかえし生じた現象でした。こうして、一九七五年のポルトガルにおいては、ブルジョア国家主義機構はロシアの二月革命から十月革命にいたる間のどの時点におけるツァー体制ないしブルジョア的国家機関よりも解体の程度は進んでいましたし、抑圧的諸勢力の麻痺も進行していました。もちろん、西ヨーロッパのブルジョア国家と社会秩序の内的な力量と安定性が、平時においては明らかにるかに大きいことを、ここで否定するつもりはありません。しかしその強さはまさに、この「平時」の維持にかかっているのです。たとえばフランスの一九

六八年五月のように、社会的「平和」が崩壊すれば、この見たところ明らかな強さも、はつきりと弱さに変ってしまうのです。

実際、ロシアに固有だったのは、ボルシェヴィキによる権力獲得の容易さではなく、逆に、権力獲得の前夜とそして何よりもその後、彼らが直面したはるかに大きな——今日の先進資本主義諸国における可能性と比較して——困難さでありました。逆説を述べようというのではありません。反レーニン主義者や中間主義者が革命的マルクス主義者に向ける批判の最も顕著な特徴は、実に、彼らがこの明白な事実を無視ないし抹消しようとすることです。ロシアの独自性は何よりも、有業人口全体の中に占める労働者階級の比重が小さかったことにあります。このことはボルシェヴィキがソヴィエト内部では圧倒的多数を占めながらも、国家全体では政治的少数派にとどまっていたことを意味します——これは先進資本主義諸国では考えられないことです。イギリスやフランスやイタリアでは、それぞれの都市の労働者評議会において六五パーセントもの票を得る党が、同時に全人口のわずか二〇パーセントか三〇パーセントの票しか得ないということは、およそありえないことです。このような不一致の社会的基礎は、何だったのでしょうか。もうひとつ、ロシアの社会的構成に固有だったのは、巨大な農民的後背地の存在でした。これが、反革命軍の再建やそれによる都市奪還の試みのための、農村の基地として機能しました。大半の西ヨーロッパ諸国の社会構成は、こうしたことも考えられないこととしています。

ロシアの社会構成の独自性としてもうひとつ、労働者階級の政治的、経済的権力の直接的行使のための技術的、文化的、政治的準備の程度が、先進資本主義諸国の場合に比べて、ずっと低い水準にあったことがあげられます。ロシア革命当時の世界情勢もまた、独自の特徴を有していました。当時の

国際資本主義は、今日のそれよりも比較にならないほど強力でした。それは比較にならないほど包括的で、しっかりとした国際的な援助と信用の制度とともに、はかりしれないほど大きな経済的、社会的、政治的、さらにはイデオロギー的な力を自由に行使することができたのです。こうしてロシア革命は、人口の圧倒的多数の消極性を基盤とし、革命を支えた少数派と比べても決して小さくはない積極的な少数派に依拠した反革命によって、そもそもの初めから転覆の危険にさらされました。加えて、武装した国際反革命が即座に軍事介入を実行する構えを示し、六カ国、七カ国あるいは八カ国からの軍隊がロシアに侵入しました。今日ではこのような作戦は少しは困難になっています！ 一九七五年にポルトガルに対してスペインの正規軍——フランスやドイツ、アメリカの正規軍は別にしても——が「出動」するということはありませんでした。スペインやイタリア、フランスで革命が勝利しても、それが最初の三カ月ないし六カ月のうちにこうしたたぐいのことに直面することはない、と私は考えています。一九一七年以降、世界は大きく変わりました。レーニン自身、イタリアやドイツやイギリスの労働者は、ロシアの労働者よりもずっとうまくやるだろうと何度も言っていました。そしてわれわれは、第三インターナショナルの創設者たちの著作のすべてにおいて、ロシア革命の綱領的、理論的、普遍的諸要素を、このロシアの十月が生じたときの困難かつ不利な条件によって規定された局面的な要素と区別しようとする、一貫した努力を見出すことができます。

したがって、この歴史的なバランスシートから得られる私自身の結論は、逆説的なように聞こえるかもしれませんが次のようになります。つまり、「レーニンの図式」、あるいは私がレーニン主義の真髓と考えるもの——すなわち、『国家と革命』、共産主義インターナショナルの最初の四回の大会の諸文書、そして『共産主義の左翼小児病』中の有効な部分をあわせた戦略——は、かつてのロシアより

も、ヨーロッパの発達した資本主義諸国の方にはるかによくあてはまる、と。ロシアに対しては全面的には、あるいは部分的にしかあてはまらなかったこの戦略は、あらゆる可能性から考えて、西ヨーロッパに対してはじめて全面的に適用されるでしょう。

革命的危機とブルジョア民主主義

——あらゆる漸進主義的な戦略とははつきり異なつて、革命的マルクス主義の考え方は、革命的危機という概念に中心的な役割を与えますね。しかし、ブルジョア社会の危機のすべてが、革命的、あるいは前革命的危機であるわけではありません。先進資本主義国における革命的危機をどのようにに理解されているのか、説明してください。フランスの一九三六年六月はそうだったのでしょうか？ 解放は？

これに関連してマルクス主義の古典が使っている概念には、いささか厳密さに欠けるところがあり、近年におけるそれなりの理論的蓄積にもかかわらず、第四インターナショナルもまだこのあいまいさを完全に解決しているわけではありません。したがって、あなたの質問は核心をつくものです。問題に最終的決着をつけることを可能とする実践的検証をまだ経ていないために、私の答は推量の範囲を出るものではありません。まず、レーニンが展開した基本的な論点を想起しておきます。大衆運動の突発的な高まりは、それ自体としては革命的危機を生み出すものではありません。このような高